Title	巻頭言　若きあるいは老いたる教師の夢
Author(s)	大木，雅夫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter，Vol.19-2 ： 1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2306
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭言

若きあるいは老いたる教師の夢

わが国の大学では、しばしば外国書講読を「原書講読」という。どこかがおかしい。ゲーテの『詩と真実』を翻訳で読まずドイツ語の「原書」（Urschrift, Urtext）で読むことはよい。翻訳に誤訳や不適訳は不可避だからである。たとえばデカルトの〈Je pense, donc je suis.〉を「われ思う。故に我あり」と訳せば、誤訳に近い。彼の方法序説の真髄は、懐疑論であり、一切を疑っても、疑う我の存在は疑えないというのだから、思ったり感じたりする甘い情緒的なものではない。〈penser〉（= denken）は、「思索する」とかむしろ率直に「疑う」と訳すべきではないか。パスカルが幾何学的精神に対置した〈esprit de finesse〉を「繊細な精神」とするのも誤訳に近い。国語辞典は繊細を「情の細やかさ」と説明するが、プチ・ロベールを引くと、「感覚の鋭さ」の意味があり、「パンセ」冒頭でも幾何学的精神だけでは割り切れない事柄を一目で見抜く明敏な洞察力のように説いている。なお、esprit は英語の spirit より mind に近いので、「幾何学的な頭」と「明敏な頭」と並べたほうがよいのではないか。

誤解を避けて「源に返れ」というのはよい。問題はその先にある。「学問」といえば直ちに金文字の「原書」に幻惑され金科玉条視したら、そこに学問と教育の退廃が芽生える。問題は東西の教育方法にかかわる。漢字の「教」はツクリが鞭を意味し、師が論語の一節を読むと弟子がこれを師の前で唱える。間違えば鞭で叩かれ、席に戻る。書を見て 50 遍、書を伏せて 50 遍、こうして「読書百遍義自ずからあらわる」という徹底した暗記教育である。鞭で知識を叩き込まれた頭脳は固くなる。教育は頭をもみほぐす営みと思うが、わが国の受験塾は何をしているか。かつて「自白は証拠の女王」であった。これを叩き込まれた者が、自白だけを証拠として有罪にできないとする憲法を読んでも、怪しげな補強証拠にとびつく誘惑を断ち切れるであろうか。最高の憲法の番人すら誤判した実例は、目前にある。自白に矛盾あれば、その矛盾の究明こそ柔軟な頭脳の働きどころではないか。

教育に相当する語は、“education”とか“Erziehung”であるが、生徒の内にあるものを引き出して育てるという意味であり、鞭で叩きこむという意味はない。東洋の学問は学び問うと書きながら、教えを受ければ口答えせず「ありがとうございます」とお辞儀して引きさがるのが通例であり、殊に禅宗は、沈黙の修行を推奨する。座禅し瞑想し、喝などと気合を入れられて以心伝心教義を悟るべきものとされる。欧米の教育にこれはない。ボローニャ大学のカリキュラムを見ると、講義の後に討論があった。中世の学者たちは「より遠くのものを見るためにのみ古代人の肩に乗った。」彼らの志は高かった。そして「論争の歯でかみこなされなかったもので完全に知られたものはない」（ソルボンヌのロベール）という果敢さと謙虚さがあった。その精神は今もある。学問とは何か。試みにドゥーデンにあたってみよ。「論争によって基礎づけられた知識をもたらす研究活動」とされているではないか。ドイツに留学してその活動の場面を目撃した若き日を、今懐かしく想う。しかしまた、なぜわが国の教育は、弟子に対して積極的に発言を求めたり自ら「下問を恥じず」と訓えて啓発教育と師弟共同の真理探究を呼びかけた孔子の教えを忘れてしまったのかと疑い、考え込まざるを得ない。だが老いの身にも救いはある。「私は教師、永遠に若く、若者らを愛し続ける」（Ich der Lehrer, bin ewig jung, und liebe die Jungen.）と歌うゲーテのこの一句をもってこの短文を閉じ、いつかまた書くことにしよう。

聖学院大学大学院政治政策学研究科長　　大　木　雅　夫